

第2学年「大すきやさいさん」の実践を通して

鹿児島大学教育学部附属小学校 教諭 永野優希

1 はじめに

今年度、自分自身の環境が新しくなったのをきっかけに、生活科の授業について向き合っていく中で、活動の中にある多くの気づき、対象の価値、これらにもっと目を向けて、子どもと共に教師自身も活動に夢中になれる、そんな授業づくりを目指したいと考えるようになった。

活動に夢中になることで、子どもは対象への思いや願いを胸いっぱいにもち、そして、その思いや願いは授業を超えて、生活へとつながっていく。思いや願いをもった子どもは、自身の生活も充実させていく。そのような姿を目指したときに、子どもにとって身近でありながら魅力のある対象に出合わせ、思いや願いを連続・発展させながら対象とのつながりを深め、主体的に学習活動を進めていくことができる授業を行っていけば、生活科で学んだことが生活の中で生かされ、子どもたち自身の生活がより充実したものとなるのではないかと考えた。そこで、対象とのつながりを深めるための手立てを充実させるとともに、郷土らしさを活動の中に取り入れながら、2年単元「大すきやさいさん」の実践に取り組むこととした。



2 実践

(1) 単元について

① 野菜を栽培する意義

平成20年1月の中央教育審議会答申で指摘された生活科の課題の中に、生命の尊さや自然事象について体験的に学習の重視が挙げられている。これは、子どもたちを取り巻く社会や自然の環境が変化してきており、子どもたちが自然に直接触れる経験が少なくなっていることや、生命の尊さを実感できていない児童がいるという状況が見られているからである。また、平成20年の学習指導要領改訂では、内容の改善が図られ、生命の尊さを実感を通して学ぶために、内容(7)「動植物の飼育・栽培」の取扱いにおいて「継続的な飼育、栽培を行うようにすること」の文言が加えられた。

これらのことから、生命の尊さを実感させるために、自分なりに植物の生命への責任をもって継続的に栽培活動に取り組むことのできる野菜の栽培活動を指導計画の中に位置付けることは、意義深いと言える。

② 野菜を栽培するよさ

一つに、野菜の栽培には、収穫の喜びを味わえるよさがある。野菜は、子どもたちにとって毎日の食事の中に取り入れられるなど身近な存在であり、収穫後の楽しみをこれまでの経験から知っている。この収穫への期待が、栽培活動に主体的・能動的に取り組む原動力になると言える。

二つに、自分の取組が成果として実感しやすい対象である。野菜は、継続的に観察や世話をすることで、発見の喜びや成長の楽しみ、収穫したいという願いが叶った成就感を味わうことができる。野菜の生長を通して、自分自身のかかわり方を振り返ることができるよさがある。特に、本単元で扱う果菜類は、葉が増えて大きくなるという変化に加え、花が咲く、実がなって大きくなるといった生長の過程を自分の目で確かめることができるというよさがある。

三つに、鹿児島は年間を通して穏やかな気候に恵まれ、農業がさかんな地域であり、野菜の栽培活動は、子どもたちにとって身近に感じる活動の一つであると言える。県内の多くの地域に田んぼや畑が広がっており、農業に従事している方は少なくなっているとはいえ、栽培単元に関する人材が豊富な地域である。

こういったことから、野菜は、子どもが思いや願いをもって主体的に活動に取り組むために実生活で身近な存在でかつ繰り返しかかわることができ、そして、かかわりの中で成就感を味わうことのできる対象であると言える。



(2) 目標

① 『自分の野菜を大きく育てて収穫したい』という思いや願いを基に、諸感覚を使った栽培活動や友達と

の情報交換を役立て、自分の野菜を育てる活動に意欲的に取り組むことができる。(生活への関心・意欲・態度)

② これまでの栽培経験や同じ野菜を育てている友達との情報交換、そして野菜作りに詳しい本市の人に尋ねたこと等を基に、諸感覚を使って自分の野菜を観察し、試行錯誤しながら世話をすることができる。また、観察したことや世話をしたことを絵や文に表すことができる。(活動や体験についての思考・表現)

③ 野菜が生命をもつことや生長していること、それぞれの野菜に合った世話の仕方があることに気付き、自分の野菜に愛着をもって心を寄せながら大切に育てることができる。また、野菜を生長させることができた自分のよさや成長に気付くことができる。(身近な環境や自分についての気付き)

(3) 指導計画(全11時間)

学習過程	主な学習活動	時数	主な指導上の留意点
意欲をもつ	1 育てたい野菜を決め、木市に買い物に行く計画を立てる。 2 木市に野菜の苗を買いに行く。 (鹿児島市春の木市での購入：地域素材の活用) 3 野菜の苗を鉢に植え、今後の活動について話し合う。	4	○ 野菜の栽培意欲を高めるために、自分の苗を買いに行く計画を立てさせる。 ○ 自分の野菜への愛着をもたせるために、木市へ出かけ、自分で選んだ苗を購入させる。 ○ 人とかかわりをもたせるために、店の人へのインタビューをさせる。
活動する	4 野菜の観察をしたり、世話をしたりする。 5 野菜に合った世話の仕方について話し合う。 ※ 4と5の活動を繰り返す。 6 野菜を収穫し、その喜びの気持ちを伝え合う。	5	○ 日常にかかわることができるようにするために、教室前で栽培させる。 ○ 観察や世話の仕方を試行錯誤させるために、友達の野菜と比較させたり情報交換したりする場を設定する。
振り返る	7 野菜の後片付けを行う。 8 単元全体を振り返り、自分の頑張りと工夫、野菜に対する思いを表現する。	2	○ 野菜の生長や自分の取組のよさに気付かせるために、これまでに蓄積した観察カードを基に振り返らせる。

(4) 野菜を選ぶ観点

栽培する植物を選択する際の観点として、小学校学習指導要領解説生活編には次のように示してある。

- ①種まき、発芽、開花、結実の時期が適切なもの
 - ②低学年児童でも栽培が容易なもの
 - ③植物の成長の様子や特徴がとらえやすいもの
 - ④確かな実りを実感でき満足感や成就感を得られるもの

以上の観点から、本学級では子どもたちとの話し合いの結果、以下の野菜を栽培することとした。

トマト、ミニトマト、キュウリ、ナス、ピーマン

上記の野菜は、子どもたちの食生活になじみ深く、栽培方法も比較的容易で、世話の仕方によっては、たくさん収穫できる野菜である。また、これらの野菜は、生長の様子や特徴が捉えやすく1年生でのアサガオの栽培経験や諸感覚を使った観察から、多様な世話の必要性に気付き、試行錯誤しながら世話をすることができる。さらに、これらの野菜に加えて、「ニガウリ」を選択できる野菜の一つとすることにした。これは、ニガウリが鹿児島では「ニガゴイ」や「ニガゴリ」などと呼ばれ、味噌炒めや生節和えなどの郷土料理の食材として使われるなど、鹿児島になじみの深い夏野菜であり、郷土教育の観点から見て、意義深いと言えると考えたからである。

(5) 栽培活動に向けての準備

本校では、野菜の栽培は一人一鉢で行っている。鉢のサイズは9号鉢を使用している。9号鉢は直径、高さがともに30cm程度で野菜の栽培に適している。また、9号鉢は、土を入ると10kg弱の重さになり、鉢を移動させるには2年生の子ども一人では難しく、友達との協働を生みやすい。

栽培活動に入る際には、園芸店の方から、鉢を置く場所や整枝の仕方、支柱の立て方、追肥のタイミング等のアドバイスをいただいた。活動がメインとなる生活科では、専門家との連携は不可欠である。今回の実践でも、園芸用の支柱とPEテープを使った支柱の立て方などを教えていただいたが、専門家ならではのアイデアは野菜の栽培活動で多いに役に立ち、連携の大切を改めて実感した。



《PEテープを使ったあんどん仕立ての支柱》
支柱を三か所に立て、上部からPEテープをらせん状に巻きつけていく。身近な材料を使っており、子どもでも簡単に作ることができる。



協働しながら、支柱を立てる子どもたち



(6) 実際

学習過程	子どもの活動の様子
意欲をもつ	1 育てたい野菜を決め、木市に買い物に行く計画を立てる。 ミニトマト)をそだてたいなあ きゅうり)をそだてたいなあ どうして、その野菜を栽培したいのか、その時の思いをワークシートに書かせた。その後、書いてあることをもとに、それぞれの思いを交流する時間を設定した。すると、交流を通して、『自分も家族に食べさせたいな』と考えを広げる姿が見られた。
	2 春の木市に出かけ、自分の育てたい野菜の苗を買う。 『野菜を育てて家族に食べてもらいたい』など、栽培活動に対しての思いをもった上で、木市に出かけたことで、店の人に対して栽培方法について積極的にインタビューする姿があった。 水やりは、どれくらいすればいいのかな。 水だけでなく、肥料もあげないといけないんだね。 《鹿児島市の木市について》 明治の中頃から始まったとされる木市は、毎年春と秋の年2回、緑化樹木、盆栽、果樹苗木、花壇苗、野菜苗などが展示出品されている。鹿児島市民にとっては、春と秋の風物詩として親しまれている。 苗の購入については、園芸店等で購入する方法もあるが、郷土ならではの催しに参加させることで、郷土への関心を高めることができるというよさがある。
	3 野菜の苗を鉢に植え、今後の活動について話し合う。 アサガオを育てたときには、葉っぱに水が直接かからないようにしていたよ。 元気なそっくりさん おいしいやさいさん になつてもらいたいです。 木市へは市電を利用して出かけた。買い物の計画を立てる際には、公共物や公共施設を利用する際の態度やマナーについて十分に話し合いを行った。本校は、通学で市電やバス、JRといった公共の乗り物を利用する子どもが半数以上いるので、実生活とのつながりという点からも、市電での態度やマナーについて考えることは大切な学習活動である。 木市でのインタビューや1年生でのアサガオの栽培活動を想起させながら、土づくりや苗植えを行った。 自分で選んで購入した苗ということもあり、心を寄せながら苗植えに取り組んでいた。また、『元気に育てたい』と今後の栽培活動に対する思いを深めることができた。植え付け後は、自分の野菜への愛着をもたせるために、自分で考えた名前を付けさせた。(トマトの「トマチー」、ミニトマトの「ミニちゃん」など)

4 野菜の観察をしたり、世話をしたりする。

対象にかかわる活動



諸感覚を使った観察



生長に合わせた世話

野菜さんは、どんどん生長しているよ。
野菜さんに合ったお世話が必要だな。

対象にかかわる活動の中に、交流活動を設定することで、思いや願いを連続・発展させながら活動に取り組む子どもの姿が見られた。

交流する活動



私の野菜と友達の野菜は、違うところがあるみたいだよ。

茎が倒れてしまっているけど、どうしたらいいのかな？

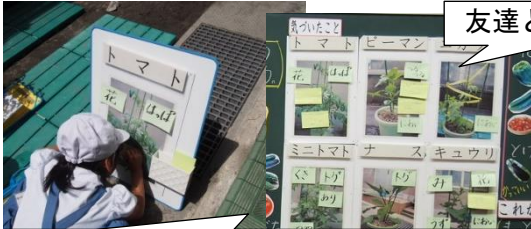
水やりの他にも、必要なお世話がありそうだね。

友達との情報交換

5 野菜に合った世手の仕方について話し合う。

話し合いを充実させるには、視覚的な情報を交流の中で活用していくことが有効ではないかと考えた。そこで、以下のような手立てを話し合いの中で取り入れた。

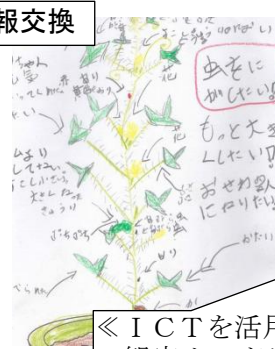
友達との情報交換



《情報ボード（気付いたことを書いて貼れるボード）の活用》

情報ボードに書いてあることを基に、考えを交流させた。

野菜の鉢の配置は、同じ思いや願いをもった子ども同士の学び合いが生まれやすいように、同じ種類の野菜が近くになるように意図的に行った



《ICTを活用した交流活動》

観察カードにかいた内容をスクリーンに映しながら自分の考えを発表させる。観察カードに記した内容には、今後解決していきたいことや、一番心に残った気付き等を赤で囲ませ、思いや願いを意識できるようにした。



<授業外の活動>



《学年朝会での野菜の栽培活動の交流》

本校では学年朝会が月に一回程度設定されている。野菜の栽培単元の時期に合わせて、栽培活動で感じたことについて交流する内容を実施した。

会の最後には、栄養教諭に食育の面から野菜を食べるよさについて講話をしてもらい、栽培活動への意欲をさらに高めることができた。

6 野菜を収穫し、その喜びの気持ちを伝え合う。

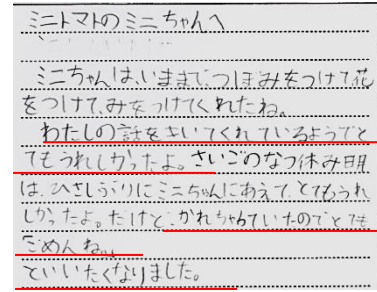
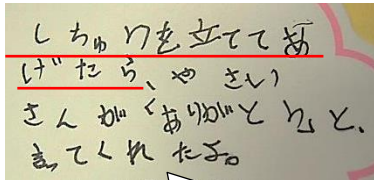


大きなキュウリが収穫できてうれしいな。
家族と一緒に食べたいな。

こんなにたくさん収穫できたよ。
ミニトマトさん、本当にありがとう。

6種類の野菜から選択しているのので、野菜によって収穫時期は異なるという実態があった。そこで、生活科の授業だけでなく、朝や帰りの会などの授業以外の時間を活用しながら、気持ちを交流し合わせた。



振り返る	7 野菜の後片付けを行う。 	枯れてしまった野菜をどうしたいかと、子どもたちに問いかけたところ、『お墓を作ってあげたい』という意見が出た。そこで、最後は、みんなで野菜のお墓を作り、鉢や支柱などの道具の後片付けを行った。 植物の生命を大切にする，使った道具の後片付けができる，これからはよき生活者の素地として大切なことである。
	8 単元全体を振り返り，自分の頑張りの工夫，野菜に対する思いを表現する。  活動の振り返りを，野菜への手紙という形で行った。 収穫の喜びなどの野菜への愛着だけでなく，最後は枯れてしまうという経験から，生命の尊さについても気付くことができていた。	 自分のかかわりのよさに，野菜の気持ちを考えることを通して気付くことができた。

(7) 成果と課題

成果	○ 木市に苗を買いに行く計画を立てたことで，放課後や休日を使って下見に行ったり，もう一度木市に出かけ栽培方法をインタビューしたりするなど，授業以外でも対象へのかかわりをもつことができたとともに，郷土のよさを実感できるきっかけをつくることができた。 ○ 日常的に繰り返し対象にかかわれる環境を作ったことで，対象とのつながりが深まり，野菜の気持ちを考えながら世話をする姿が見られた。 ○ 協働が生まれやすい環境設定の工夫を行ったことで，授業の中だけでなく，日常でも友だちの野菜にも水をかけてあげたり，友だちの収穫を自分のことのように喜んだりするといった姿が見られた。
課題	△ 子ども同士の学び合いを通して気付きの質を高めるために，対象に直接的にかかわる活動の中に，交流活動を取り入れたが，教師の介入によって個々の気付きを関連させていくことはできたものの，子どもたちだけでは，気付きを出し合うだけで終わってしまうことが多かった。一人一人が必要感をもった上で自然な交流活動が生まれるような環境設定や学習過程の工夫，また，ボードやワークシートなどの思考ツールのあり方の工夫・改善が必要である。 △ 野菜や栽培活動といった「もの」「こと」とのかかわりは深めることができたが，「人」とのかかわりや地域とのつながりを生み出すために，近隣で農業に従事されている方へのインタビューやG Tとしての活用等の活動を取り入れればよかった。

3 おわりに

「先生，見て！」休み時間になると，教室の外から子どもたちの声が聞こえていた。世話をした後には必ず野菜に耳を近づけ野菜の声を聞こうとしていたAさん。病気になってしまい，枯れてしまった野菜を見つめ，目にいっぱい涙を浮かべていたB君。虫を触るのが苦手なのに自分の野菜の葉っぱにいた虫を必死に取り除こうとしていたCさん。ただの野菜が，「ぼくの」野菜，「私の」野菜に変わっていき，自分なりに試行錯誤を繰り返しながら，生き生きと野菜にかかわる子どもの姿に，改めて，思いや願いをもった体験活動から得る学びがいかに低学年の子どもにとっては大切なのかを実感することができた。

これからも，自分の力で生活を充実させることのできる力をもった子どもの育成を目指し，教科の専門性を高めていくとともに，鹿児島県の生活科・総合の発展のためにより一層研修を深めていきたいと思います。